

# 捕らぬ狸の

**A Riddle called enigma before the "TANUKI".**

# アペンディクス



【目次】

◆冥土の旅の一里塚◆	2
◆地に満つ光はすべて星◆	8
◆捕らぬ狸のアペンディクス◆	12

## ◆冥土の旅の一里塚◆

雁は北に郷い雪割りて麦伸びる睦月、日毎に池に張る氷も厚さを増す小寒の朝。冬至より一陽起こり益々冷える日が続いている。朝食後のひと仕事を終え、日も昇って随分経つというのに、いっそうに寒さが緩む気配もない。火鉢の傍で頬杖を突いているのにも時間を持て余し、気分転換にと散歩に出かけることにした。

「阿求様。お出かけですか？」

「ええ。お昼は外で食べてきますので」

文机を片付け、新しく用意させた外套を羽織り雪沓を履いて、玄関へ。庭の手入れをしていたヤエさんに声をかけて門を出る。

「……ふむ」

ほうと吐いた息も白く凝り、手袋の上からも指先が冷たく痺れる。一面の雪が里を覆っていた。

道の端に片付けられて積み上がり、曲がり角の塀の上には並んだ雪兔。辻には色とりどりの帽子を被った雪達磨が並んで通行人を見送っており、思わず口元が緩んでしまう。

袖を重ねてぶらぶらと、足の向くままに大通りへと進む。松の内も末となり、新年の色合いもだいぶ薄れる中ではあったが、屋台や茶店は初春の喜びを祝うように今日も店を開け、支度の煙を昇らせている。

あたりに満ちる湯気と良い匂いのなか、ふらふらとあちこちを

覗いていると、なんとも珍しい顔に出くわした。

「おや、御阿礼の」

蒸かした饅頭を売る茶店の軒先。長椅子に腰をおろし浅窓の外を羽織って、もふもふと蒸したての餡饅にかぶりつくその様は、まさに威風堂々。彼女がそこに居ることの違和感を微塵も感じさせない堂に入った姿である。

「……いやあ、今日も寒いねえ」

「ええ、全く」

彼岸の死神、小野塚小町は、商売道具の大鎌を傍らに、にこにこ手を上げていた。

どこで買いこんだか、徳利の甘酒までかるく引っ掛けて、くうーと顔をほころばせる赤毛の死神小町。

まるで一仕事終えた夜勤明けのような素振りだが、転生の準備の閻魔様の手伝いで地獄の内情を知っている私は、いまの彼女が確実に勤務時間であることを知っている。

それでなおこの素振りなのだから、いやはやサボタージュの泰斗の名に恥じぬ怠けぶりであろう。

「いいんですか、こんなところで油を売っていて」

「いやいや。息抜きだよ息抜き。ちょいと休憩さ」

傍らに積み上がる皿と杯を見れば、小休憩どころか明らかに小一時間は確実にここに居たのではないかと思えるのだが、彼女はそれで済ませてしまうつもりらしい。

大体、彼女の職場は中有の道の向こう、三途の川であるはずで、軽く休憩するにしても精々がそちらの茶店であろう。それをわざわざこんな時刻から人里まで出張って来ているということ自体が胡乱であり、そもそも今朝、真面目に職場に顔を出しているのか

も甚だ怪しいと言わざるを得ない。

不真面目な死神の前に息を吐いて、腰に手をあてる。

「息抜きは結構ですが、松の内に死神が人里をうろついているというのは余りにも風文が悪くはありませんか。この時節、落語の middle だって顔出しは自重しますよ」

「あっぱっぱ、生き死になんてのはそこらじゅうに転がってるもんさ。諸行無常の響きってね、気付くか気付かないかぐらいの違いでしかないよ」

「……上手いこと言ったつもりですか」

街中を歩いていてはったり死神に出くわす方の身にもなってきたものだ。顔見知りの私ですら、文字通り寿命が縮まる思いである。

彼女の上司の苦勞を思いながら、痛む額に手を当てていると、小町さんはにまりと口元を緩めて、

「それにそう言うならそっちにもおんなじこと言っちゃりなよ」「んにゃ？」

小町さんが指差した先には、隣の卓の上で熱そうに鯛焼きを頬張る少女の姿があった。

深い緑の衣装を纏い、三つ編みに編んだのは奇しくも同じ赤毛。リボンの下からは黒い獣の耳がピンと伸び、そわそわと周囲を窺っている。

火焔猫燐。一見して猫妖にも見えるが、その実は旧地獄の怨霊の管理も司る火車なのだ。不吉さで言えば右に出るものはいない妖怪だった。

「……貴方まで」

がくりと肩を落とす私に、彼女はバツが悪そうに齧りかけの鯛

焼きを背中に隠し、ちよいちよいと猫のように丸めた手を振って見せる。

「あはは……つい誘惑に負けちゃってねえ。ほら、小町ねえさんも奢ってくれるって言うし」

「いえ、まあ、良いんですがね。……いやはや、今年は春から縁起が宜しくないようです」

「やれやれだ、嫌われたもんだねえ」

「しょうがないよ小町ねえさん、お互い因果な商売さ」

「……………」

言いたいことは山ほどあったが、大人しく飲み込んでおくことにする。

さりげなく傍に立てかけてある猫車に視線を送るが、辛いことに今は空なようだった。年の初めから見たくもないもので見ずに済んだことに、内心胸を撫で下ろす。

……それにしても。

「凄く取り合わせですね」

少なくとも町の茶店で揃うような顔ぶれではないだろう。呆れ半分でそう言う、燐さんは人懐こそうに眼を細めて、

「いやあ、小町ねえさんとはこれで3度目なだけけど、なんか意気投合しちゃってねえ」

「……だいたい出会いのきっかけは想像が付きませんが、商売敵みたいなものじゃないんですか、貴方達は」

火車と死神、共に人の死後に関わる存在ではあるが、輪廻と魂の転生のため死者の魂を導く死神と、無念や罪業に頓着なく死体を地の底へと持ち去る妖怪では、そもそもが相容れない筈だ。

死神にしてみればどんな極悪人だろうと死後の裁きは受けさせ

ねばならないだろうし、火車にしたってその為に死者を丁重に弔われれば持つてゆく死体も失われてしまう。

一緒にお昼を食べるどころか、出会い頭に争っていてもおかしくないはずなのだが。

「それでもないよ？ 小町ねえさんなら鬼籍<sup>きせき</sup>で人間の寿命はすぐにはわかるからね、あたしも効率よく死体を集められるつてもんさ」

「無縁塚じゃあ、身元不明の仏サンなんかしょっちゅうだからねえ。あたしもお勤めだから魂は連れてかにならないうけど、亡骸の方は野晒<sup>のびさら</sup>してんじや浮かばれるもんも浮かばれないからね。

それであそこが殊更に不吉な場所だつて言われちゃ、余計な罪業まで積もっちゃう。未練も不幸もどこかで断ち切らなきゃならないのさ。縁が無いからって無念まで募らさせるのは死神としても捨て置けないだろう？」

「……成程。そういう見方もある訳ですね。地獄の炉の焚き付けにされる側としては些か容認<sup>ようにん</sup>したい部分もありますが」

名前繋がりで卒塔婆小町を気どっているわけではないと思うが、痩せた犬の腹を満たすくらいであれば構わないということだろう。死神が魂を連れてゆき、火車が残った死体を運んでゆく。それでお互いに良いのならば見事な共生関係と言えなくもない。

……地上と地底の区分なり、死者の死後の扱いなり、倫理的なあれこれについては問題が山ほどありそうな気もするが、それについては妖怪の賢者やら閻魔様の領分とも言える。彼女達が黙認しているというなら、私が口を出すようなことでもないのかもしれない。

そんな事を考えていると、甘酒の杯を空にした小町さんにすか

さず燐さんがお代りを注ぐ。

「でも、三途の川の渡しつてのは自由気ままそうで羨ましいねえ。魂を好きなだけ運んで、おまけに懷も暖まるっていうじやないか。あたしもあやかりたいもんだ」

「あつはは。そんな褒められたもんじやないさ。上司は厳しいしお小言ばかりだし、ゆっくりする暇もありやしない。神って文字は付いてても嫌われるのは似たようなもんだよ？」

とは言いつつも満更でもなさそうな小町さん。そもそも妖怪が死神を見習つていいものなのかどうか。いや、人間の立場からすれば、死神も火車もせめて年の頭くらいは怠けて頂くに越したことはないのであるけれど。

「そうだ。小町ねえさん、今度旧都のほうにもおいでよ。良い店があるんだ」

「へえ。そりや面白そうだ。温泉も出てるんだっけか？」

私が黙ってしまったのをいいことに、死神と火車はすっかり打ち解けた様子であれこれと宴会の予定に花を咲かせていた。

どうでも良いことだが、正体を隠す気もないこの二人を堂々と客に迎えているこの店の主人、中々に大物なのではなからうか。

「……んっ。いや、しかし冷えるねえ。こんな日は一日、あつたかくして美味いもんでも食べてごろごろしてたいよ」

「そうだねえ、炬燵にでも入ってね。……地底と違って地上はやけにこころ熱くなったり寒くなったりでいけないよ。ねえ。そう思わないかい？」

「……そこで突然同意求められまして」

甘酒を酌み交わしながら、こちらを伺ってくる二人に、思わず後ずさってしまふ。

と言うか現状、すでに半分以上その願いは達成されているんじゃないだろうか。

なんとなく警戒して距離を取ろうとしたつもりだったが、いつの間にか死神の手は私の方へと回っていた。

「いいじゃないか、知らない仲じゃなし、ちよいと付き合いなよ。……おやっさん、もうひとつ追加で！」

「あいよ！」

威勢のいい主人の返事を聞いた頃には、私も一緒に長椅子に座らされていた。

……そう言えば彼女の特技は物事の距離を自在に操ることではなかったかと思に至るが、今更遅い。

「あと領収書も頼むね、是非曲直庁あてで」

明らかに公金横領っぽいフレーズも聞こえたが、ここは敢えて無視を貫く。……せめて生きている間くらい、彼岸の経理事務で頭を悩ますのからは解放されたいものである。

店の主人が返事をして、すぐに次の皿が運ばれてきた。

「来た来たっ♪」

耳を揺らして、新しい鯛焼きの山に手を伸ばした燐さん。がぶりと噛み付いたものの、すぐに顔をしかめて口を離す。

やはり火を抜おうと外見通り猫は猫、熱いものは苦手のようなのだ。

「さ、遠慮せずに食べな」

「はあ」

こちらにも差し出される蒸かし饅頭。なんというか、黄泉の神饌のようで笑うに笑えない気分だった。それでなくとも死神と火車に囲まれてお昼と言うのも洒落にならない。

……まあそれは流石に考え過ぎにしても、要はこれ、サボりの

共犯者の誘いなわけで、食べたら閻魔様のお説教の巻き添えは必至なのではないだろうか。

などと思いはしたものの、結局小腹が空いていたのも確かであり、せつかなので頂くことにした。

まあ、彼女たちとの心の距離が縮んだのだと、まあそういうことにしておく。

「あ。美味しい」

「だろう？ 寒い日はこういうのが一番温まるからねえ」

手にした中華饅から滲みだす肉汁に舌鼓をうちつつ、もふもふと口に運ぶ。

「どうだい、最近はい」

「むぐ。……あむ。そうですね。すっかり平穩ですよ。秋の実りもいつも通り。少し雪が少ないのが気になりますが」

幻想郷において、異変というのは日常でもある。そういった意味で春先には妖精たちが戦争を起こしたというし、鴉天狗があちこちと写真を撮りまわったとか、有角の仙人があちこちに姿を見せてお節介のような忠言をして回ったとか、あれこれと騒動の種は尽きないが、概ねいつも通りという意味で平穩ではあった。

「鴉天狗だっけ、地底にも来たよ。白黒いのと黒っぽいのが」

「へえ。天狗って一匹だけじゃなかったのかい？」

熱そうに舌を出しつつ、鯛焼きの尻尾を抓む燐さん。

「一年も本当にあつという間ですよ、ついこの間、神社の例祭をしたばかりのような気もしますが、この分ではこちらにまたお邪魔するのもそう遠くないかもしれません」

「ははは。人間はちよつと見ないうちにすぐに年寄りになつちまうからねえ」

そんな事を言いながらも、小町さんの表情はどこか寂しげだった。

それこそ日常のように人の死に触れていながらも、けしてそれを当然とは考えない。だからこそ、彼女は死後の魂に最も近い、三途の船頭などを続けているのだろう。

ふうふうと餡饅を冷ましている燐さんの横、運ばれてきた番茶を啜りながら、死神は言う。

「さっきの話じゃないが、死神も嫌われてなんぼの商売さ。だからまあ、恋せよ乙女ってことかね。熱き血潮の冷えぬ間に。明日の月日はないものを、ってね」

「……ふむ」

いつの間にか、こちらが反省を促されている。なんだかんだ言いつつも、彼女も面倒見のいいのは変わらずで、上司同様にお説教も嫌いだ。ないのだ。

苦笑しつつ湯呑みに口を付け、一息。

「命短し恋せよ乙女。朱き唇褪せぬ間に。……それならいつそ私も追い返してみますかねえ。転生の準備もあればあれで色々大変なんですよ」

「……おいおい、あんたが天人になられちゃ困るよ？ 今でさえあれこれ覚えてて手に負えないのに」

「そうだねえ。あたしも運んでみたいし」

死神に同意して、火車までも口を挟んでくる。

引く手数多——という事かも知れないが、ああもう新年からなんと縁起の悪い。

「本人を前にしてまあよく言ってくれますね」

今日は枕を反対にして寝た方がいいのかもしれない。

なんとなく背中に寒気など覺えつつも、そんな事を心に留め置くことにした。

——アジャリカモクレキユウライサイ  
阿舍利華木蓮求来齊。

(了)

初出：PARALLEL DREAMERS  
the fantastic memorial fan books

二〇一一年二月二〇日  
求代目の紅茶会&科学世紀のカフェテラス

※再録に当たり改稿しています。







## ◆地に満つ光はすべて星◆

東風も吹き始めんとする2月の頭。

真っ白なままの原稿を前に、私は頭を抱えていた。

「……はあ……」

鉛が入ったように重い筆を置き、書き損じた紙を丸めて屑籠に放り込む。今日までに草稿がまとまっていなければならぬというのに、原稿は一字も進んでいなかった。

「安請け合ひするんじゃないかった……」

吐息とともに卓に突つ伏す。先日、酔った勢いで引き受けた某所の寄稿文は、思いのほか難航していた。

さして分量があるでもなく、ここ数カ月は差し迫った仕事もなく、すぐに仕上げることもできたらうとそう踏んでいたのだが——どうした具合がまったく筆ののらぬまま、日にちばかりが過ぎてゆく。

壁にかけた曆を眺め、冷めきった紅茶を飲み干す。気付けば期限は目前に迫っていた。これが自著ならば、諦めて愚痴でも書き連ね、寝酒の一口もしながら布団に入ってしまったら済む話なのだが、今回はそうもいかない。どうにもこうにも煮詰まっていた。あれこれと唸っているうちに、すっかり夜更けとなってしまうたのであった。

丑三つ時の窓の外は、ほのかな月明かりの他には動くものも見

当たらない。春まだ遠い幻想郷の夜は、積もった雪のもたらす深い静寂に覆われていた。

仮眠でも取るべきかと思うけれど、紅茶の飲み過ぎか、まるで眠気を感じない。

「……仕方ない、すこし気分転換に出てきますか」

だから、その思いつきは実に分かりやすい現実逃避であったと言えよう。

雪沓と外套、手袋に身を固め、胸元には懷炉を忍ばせて。

里をぐるりと一回りする程度のつもりで歩き出した夜の散歩が、いつのまにか森を抜け、はるか郊外まで伸びてしまったのは、ここ数日の缶詰めでいい加減に気が塞いでいたこともあるのかもしれない。……あるいは、こっそりと夜歩きをすることへのちよつとした背徳感か。

普段、夜中は危険な妖怪への遭遇率が上がるため歩くことのないようにと言っている私自身が、洋灯ひとつでふらふらと深夜の郊外を彷徨っているのだから、あまり笑えた話でもないのだけだ。

「夜は短し歩けよ乙女、ですかね」

ほうと吐いた白い息が、凍りついてきらきらと夜月の中に舞う。十七夜ほどの美しい月明かりの下、夜はただ静謐に満ちていた。

洋灯の油が乏しくなりはじめる中、すっかり身体も暖まり、気分転換というには十分に歩いたのだけれど。なんだかこのまま帰るのが勿体なくて、もう少しもう少し思っているうちに、いつしか大きく里を離れ、気付けば脚は妖精たちが住む湖畔にまで伸びていた。

「……ほう」

雪が薄く積もったばかりの新雪を踏みしめ、白い息の向こうに星空と一面の湖が見えた時は、少なからず感動も覚えていた。夜更かし好きの妖精たちも、流石にすでに晦へと帰り、湖の主が姿を見ていることもなく。湖は湖面をしんと静まらせていた。山の上に神社と主にやってきた湖は、この季節端まで凍り、一面を白くさせているというのだが、こちらの湖は全面凍結することはありません。いつも氷精が暴れているのに、不思議と言えば不思議なものだ。

しばし、鏡のような水面に見惚れ——外套の下で汗ばむ首筋に寒さを感じて、そろそろ戻ろうかと思った矢先。

湖畔の一角に、ぼうと点る灯りを見つけて、私の脚は自然、そちらへと向いていた。



「こんばんは」

「……へ？」

まさか話しかけられるとは思っていなかったのだろうか。紅い屋敷の門前に屈みこんで、一心不乱に作業に没頭していた彼女は、呆けた顔でこちらを見上げる。

紅魔館の門番、姓に主と同じ紅の字を頂く妖怪——紅美鈴。

「阿求さん。どうしたんです、こんな遅くに」

「寝付けないもので散歩ですよ。そちらこそなんですか、この有様は」

彼女の周囲には、無数の雪灯が築かれていた。雪を固め、氷を硝子の代わりにして灯す、氷の灯籠である。

「いやあ……その、なんといいますか、夜の見張りは間が持たないと言いますか」

周りを見回し、美鈴さんは照れたように頬を赤くして、罰が悪そうにがりと足元の雪を蹴る。

雪の白と氷に反射し、星のようにちらちらと瞬く光の群れが、一斉に瞬いた。

「それで幻燈ですか？」

「ええ。そう言えばもう春節だなんて思いました」

「ああ」

「今日のお夜食が月餅だったんですよ。それでなんだか、懐かしくなっちゃって——あの、できれば、サボってたのは咲夜さんには秘密にしていただけませんか？」

「そうですね」

私が淡々とみせると、彼女は帽子の下からまだ手をつけていない月餅を二つ、取り出して私に押し付けてくる。せっかくの好意を無駄にしてはいけないので、ありがたくひとつ頂くことにした。

「まあ、考えておきます」

「……ありがとうございます」

見た目もそうだが、とにかく彼女はこうした四季の機微に敏感だ。多く妖怪というものは、長命であるが故に人とは時間の捉え方が違う。自分に関係なければ四季の巡りや年中の区切りなどには余り興味を持たない者も多い。無論個人差はあるのだが。

しかしこの門番は花壇の世話も仕事にしていることもあってか、とかく人間臭いのであった。

まだほんのりと温かい月餅を油紙から出して頬張りながら、あたりに揺れる雪洞の灯に目を向ける。

「……あちらの春節では花火に爆竹に、もつと賑やかで騒がしいんですが、門の前でやっちゃうと怒られちゃいますからねえ。せめて元宵節ということで、灯りでも思つたら……」ついつい楽しくなつてしまつて、百枝灯樹つて訳にはいきませんが、ま、これくらいは目に見てもらおうかと」

深い雪夜に灯される幻燈の明かりはほの紅く周りを照らす。

夜筆の明かりにするには少々心許ないが、雪夜に灯す灯りとし  
ては上等だろう。

ほのかに揺らめく炎からは、ほんのりと辺りに甘い香りが漂う。

「これは……」

「蜜蝋です。本当は鯨脂でも手に入ればいいんですが」

なるほど、どこで調達したのかと思えば蠟燭も自作だったらしい。蜜蜂が巣を作る時に分泌する蠟は、煤も少なく上等な明かりを作るのである。

かすかな蜂蜜の香りは、風のない冬の夜にも心地よく満ちてゆく。明るさの基準となる単位は「燭」<sup>カンデラ</sup>、つまり蝋燭の明かりを基準にして作られているという。文字通りこころは、灯の生まれる場所なのだろう。

私がゆつくりと月餅を味わう間、美鈴さんは自身の故郷に伝わる風習を教えてくださいました。

元宵節は旧暦の元月の末となる十五日の宵に行われ、多くの幻燈を往來に灯して新年を祝うものであるのだという。軒先の行燈と言へば最近では万霊節が盛んだが、こちらの灯はそうした死者を悼むものではないらしい。

当時の帝が反乱を平定し、それを祝ったのが始まりであり、それ以降、帝は毎年この日には宮殿を出て、民衆と共に祝賀を行つたそうだ。

「それが天官を祝うお祭りと一緒になって、華やかに灯りを彩るようになったんですよ」

「ほう」

「……まあ、幻想郷にはあんまり私と同郷の妖怪もいませんし、一人ではしやぐのものとかがいますけどね」

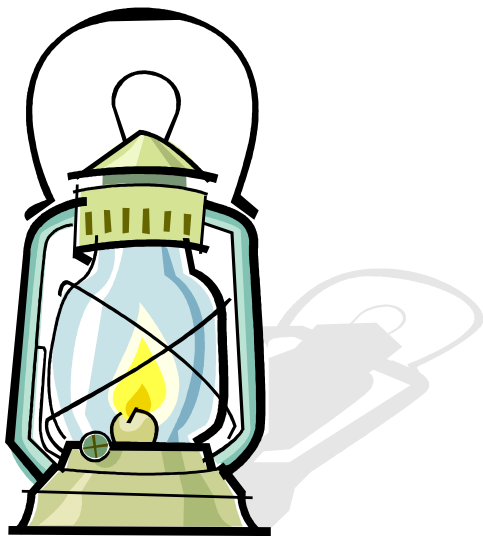
「最近、大陸出身の邪仙さんがやってきたみたいです」

「ええ、青娥さんと芳香ちゃんですよ。先日、お嬢様を訪ねていらしたときに私もお挨拶させていただいたんですが———なんだか妙に嫌われてしまって」

失礼があつたんですかねえ、と頬をかく美鈴さん。とかく人当たりのいい彼女が一方的に嫌われることなんてあまりないように思うが、さてどういった理由なのだろうか。

「阿求さんもおひとついかがですか？」

言いながら、美鈴さんは見事な細工の蠟燭をひとつ、私に手渡してくれる。ひよっとして作りすぎて持て余しているのではないかなとは思いましたが、折角なのでおとなしく頂いておくことにした。



## ◆捕らぬ狸のアペンディクス◆

草木萌ゆる啓蛰の候。一足早く里に訪れた春の陽気に、土も緩み、庭では白桃が花を広げている。あとひと月もしないうちに桜が開いて、里も賑わうことだろう。ふと見上げた空に思わず春告精の姿を探してしまうのも道理か。

「んっ……」

背筋を伸ばせばきばきと、凝り固まった腰が音を立てた。猫が伸びをするように腕を伸ばして肩を回す。欠伸とともに浮かんだ涙をぬぐい、重くなった眼頭を押し揉んでほうと息を吐く。

どうにも集中して机に向かうと姿勢が固まってよろしくない。寺子屋時代にもよく慧音先生に姿勢の悪さを正されたものだが、結局身についてはいないのである。小鈴にも勧められて眼鏡も作ってみたが、どうにも煩わしくて使っていない。

教え子のためなら時に愛の鞭を振るうことも辞さない、慧音先生の熱意には感服しきりではあるけれど、記憶に残っているのはあの目から火が出るような頭突き衝撃だけである。なんとも申し訳ないなと思いついて苦笑した。

「……一息入れましょうかね」

ううんと背中を反らして、なんとなく体操などしてみたり。

先頃、幻想郷縁起の改訂作業も済ませてからこの方、私の毎日は部屋の隅に積みっぱなしとなっていた本を片端から読み耽ること

とで構成されていた。

寢床に入って夜更けまで頁を捲っては昼過ぎまで朝寝坊し、寝巻のままずっと朝ご飯。誰が文句を差し挟む事もなく、実に優雅な毎日である。御阿礼の子という立場でもなければ中々許されないだろう自堕落な日々だが、流石にこれだけ続けていると少々気まずさもあつた。

そもそも、うら若き乙女が毎日自室に閉じこもって読書三昧というのは、あまり褒められた事ではあるまい。

卓上のティーカップに手を伸ばしてみるが、生憎と中身は空だった。

「……ふむ」

縁側の障子をあけて見れば、空の色は午後から夕へと傾く薄朱。遠く命運寺の鐘の音がかすかに響く。これからお茶というには少し遅い時刻だった。

気付けば今日も一日、読書に熱中して過ごしてしまった。良い天気なのにちよつと勿体なかったなと思いつつも、夕空を見上げながらこれからの過ごし方を思索する。

「ちよつと出てきます。ご飯は食べてきますので」

荷物を桔梗が刺繍された巾着袋にまとめ、ヤエさんに言付けて邸を後にする。

こうして気まぐれで出かけることについては、彼女をはじめ使用人の一同からたまにお小言をいただくのだが、いくら稗田の家で御阿礼の子として箸の上げ下げまで世話になっているとはいえ、うら若き乙女としてそれなりの自由は満喫したいものである。

編み上げのブーツに、春を先取りした萌葱の外套を一枚羽織って、里の通りへと出た。

春の足音が近づき、雪もすっかり消えたところか、通りは賑やかなものだ。まっすぐ目的地を目指しても良いのだが、折角の気分がいい時間、ぶらぶらと散歩のつもりで遠回りを決める。

通りでは煉瓦積み風のモダンな喫茶店や蓄音器、鋳石ラヂオの並ぶ店の軒先を、ガス燈の赤い光が照らしていた。

「そう言えば、春から灯りをガスから電気に切り替えるんじゃないかね」

数年ぶりに再開されたラヂオの試験放送以来、里はちよつとした欧化ブームである。今更ながらの文明開化にかぶれた霧雨某氏が里に路面電車を走らせたいと言い出し、建築計画をぶち上げてあちこちで話題となった。

なにしろ単身、河童の集落に向かって技術協力の直談判までやってのけたというから、その熱意は相当なものだろう。

……完成は5年後。里の端から端までを結ぶだけの短い路線とはいふものの、果たしてどうなるものか、今から不安と興味が入り混じって噂となっていた。

——と。

「それじゃあの、失礼するよ」

呉服屋の軒先に、気になる顔を見つけて私は足を止めた。

チェック模様の襟巻を撒いた眼鏡の女性だった。長い髪を背中でくくり、見事な羽織紐をあしらった袖には丸に一つ瓢。彼女は唾えた煙管からばかりと煙を吐きだし、畏まって頭を下げる若旦那に、鷹揚に頷く。

「……ふむ」

若旦那に見送られた彼女が一人になったのを見計らって、私は彼女に声をかけた。

「こんにちは」

「——おう？」

「ご精が出ますね」

驚いたように振り向く彼女に、私は飛びきりの笑顔を作った。こりと微笑んで見せた。

「こりやあ稗田のところのお嬢さんじゃないかの。なんでこり用ならいくらでも用立てさせて貰うが」

「……人を化かすのは狸の習性なのかもしれませんが、見境なく人を誑かすのは感心しませんね、二ッ岩明神さん」

「おや、ばれとつたのか」

悪びれもせず答え、たとえ地面を跳ねた彼女は、宙でぐるんと身を回す。すると、どろろんと噴き上がった煙の中から、まったく別の姿が現れた。

チェック模様のマフラーに丸眼鏡は変わらぬままだが、紋付袴に、癖のある短い髪から飛び出す丸い耳に、背中に揺れるふさふさの縞尻尾。

僅有絶無の外來妖怪、二ッ岩マミゾウ。聖徳王の復活に伴い外界より招かれ、妖怪寺・命蓮寺に腰を落着けることになった化け狸である。

「……おぬしにはこの格好は見せておらんかったと思つとつたがのう」

「仕事柄、妖怪の方には多く接していますからね」

澄まして答える私に、彼女はほうと感嘆の声を上げた。

「これはこれは、阿礼乙女の見識を見縊っておったかの。いやいや、すまなんだ」

……種を明かせば、教えてくれたのは魔理沙さんである。彼女

が先日、里の近くで狸の宴会を開いていたという話を聞いてピンときたというだけの話だ。

「聞いてますよ、呉服屋の若旦那が二ッ岩明神さんにすっかりお熱だそうじゃないですか。大旦那の止めるのも聞かずに着物だ簪だつて贈り続けて、このままじゃ身代を持ち崩すんじゃないかって噂になってるくらいですからね」

「かつつか。ありやあ、あの小僧が勝手に入れ込んでおるだけじゃよ。狐どもと一緒にされるのは心外じゃなあ」

言いながらも、本人も満足ではなさそう。こういうのも若い燕と言うのだろうか。

「しかし、流石に稗田のお嬢さんじゃな。そこまで耳にしとると思わんかったぞ」

「二ッ岩明神さんの評判は黙っていても良く聞こえてきますからね」

「なに、慣れん土地で右往左往しとるのが面白おかしく聞こえてくるだけじゃろうて。……よつと」

再び宙に飛びあがり、元の人間の姿に化け直す彼女。

謙遜してみせるが、彼女がすでに里に少なからぬ影響力を持っているのは揺るぎない事実だ。極めて良心的な——場合によっては無利子で金を貸すという金貸し、二ッ岩明神に窮地を救ってもらった商売人という話はこの所よく耳にする話だった。

彼女も積極的に里に顔を出し、経営相談やら建築やらと、あちこちに首を突っ込んでいる。

「とは言っても、小鈴にちよつかいをかけるのはあまり見過ごせませんが」

「儂はちよいと警告してやっただけなんじゃがなあ」

本居小鈴。貸本屋『鈴奈庵』を営む私の友人である。最近ふとした事から能力に目覚めたばかりの彼女には、どうにも危なっかしいところが多い。

霊夢さんもそれを気にしていて、割合頻繁に顔を出すようにしているようだ。小鈴も随分懐いているようだ。が、博麗の巫女として毎日彼女にだけ張り付いているわけにもいかないだろう。

そんな小鈴が最近すっかりお熱なのが、人に化けた彼女——里で噂の金貸し、二ッ岩明神なのである。

『そうなのよ、すつごく格好良かったんだから!』

ふらりと鈴奈庵を訪れ、小鈴が手にした妖魔本の危険性を指摘して、名も告げずに颯爽と去っていった正体不明の女性。小鈴は生憎とその正体を知らないらしいのだが——一度や二度ならばともかく、会うたびに繰り返されてはさすがに辟易するばかりだ。

思わずぼやく私に、マミゾウさんは苦笑い。

「しばらくあの近辺には顔を出せんなあ。……誤解のないように言っておくが、誓って儂は、あの子をどうしようなんぞとは思っておらんぞ?」

「その割には、あなたのお仲間達は随分とあの本にご執心なようですが」

「さて、何のことか?」

——いやはや、化生というのは油断するとすぐこれだ。

最近、里に出入りしている狸の数が増えたというのは、まことしやかに語られる噂である。人に化けてあれこれと悪戯をする狸たちの元締めが誰なのかというのは、考えるまでもないことであつた。

「いろいろと物騒なことがあつて難儀じゃなあ」



丸いレンズの向こうに表情を隠し、マミゾウさんは嘯きながらぶかりと螺鈿細工の煙管で煙草をふかす。

煙草は狐や狸に化かされぬようにする方法の一つだ。獣は強い匂いを嫌うし、落ち着いて一服することで冷静さを取り戻す役目があるからなのだが、彼女は自らその煙草を吹かしているのだから、まったく人を喰った話である。

なんとも分厚い面の皮に、私がしばし呆れていると——彼女はちらりと私の荷物に視線を走らせ、ぽんと手を叩く。

「ふむ。その様子、これから湯に行くんじゃないな？ 丁度良い、折角だから腹を割って話してみんか？」

「……はい？」

「裸の付き合いつて言うじやろ。ほれほれ、遠慮線で良いよ」

いつの間にか、私の肩にさりげなく手を回し、化け狸はそのまま来た道を急ぎ始めるのだった。



間欠泉騒動以来、幻想郷のあちこちに湧いた温泉は、特に枯れる様子もなく湧出を続けている。一時の爆発的な噴出が収まり、時間当たりの湯量こそ減ったものの、安定した湯量はむしろ利用する側にとってみれば都合良かった。

地底の地獄鴉が守矢神社の主導する地熱エネルギーの管理のため、間欠泉センターで働くようになってなおその安定化は進んでいる。

里にも3カ所、あたらしく温泉が湧き、そのうちのひとつがこうして日帰り湯として経営されている。その気になれば泊まる事もできるが、食事は自炊のうえ、自宅の眼と鼻の先で温泉旅行もないだろうと思う者が多いためか、ほとんどが銭湯気分での入浴であった。

それでも、まもなく夕食時となろうと言うこの時間、わざわざ湯に浸かりに行く物好きはそう多くないらしい。

入り口でわずかばかりの入湯料を払い、暖簾をくぐれば、そこには既に湯の熱気が籠っている。温泉と地熱を利用した暖房装置は、河童の手によるものであった。龍神様の像以来の人里での仕事に、彼等も存分に腕を振るったようだ。

妖怪の作るものは大抵、人間には使いづらくつたいな仕様になることが大半だが（似ているようでも彼等は別の種族である。河童にお湯に使って温まる習慣は無い）、その架け橋となったのは

守矢神社の風祝であった。

妖怪の山で信仰を得た彼等は、人間達の理となるように妖怪達に仕事を任せるようになったのである。もともと人間に対しては好意的な河童たちだ。種族特有の引つ込み思案が是正されれば、距離が縮まるのは早かった。

湯気の立ちこめる岩作りの浴槽は、なみなみと透明な湯を湧き上がらせていた。

「ほほう、貸し切りじゃな。こいつは都合が良い」

手早く服を脱ぎ捨てたマミゾウさんは、元の姿に戻って桶を片手に満足げ。ふさふさの大きな尻尾を揺らし、左右の耳もびこびこ楽しげに跳ねる。

凹凸のはっきりした肢体を恥じる事もなく惜しげなくさらし、

肩に手拭いをひっかけて悠々と浴場へ歩み出てゆく。実に羨ましい——ああいや、化け術の達人たる狸であれば、外見をいじるくらいのは自在にできるものなのだろうか。それはそれでもつと羨ましい。

私も湯船に近づき、桶に組んだお湯で足に掛け湯をする。寒さは緩んだと思っていたが、外を歩き回っていたせいか思っていたよりも身体は冷えていたようで、温泉の暑さはじんと爪先を痺れさせた。

「はあ……っ」

沁みるような熱さの湯船に、そろそろと身を沈めてゆくと、自然喉の奥から呻きが漏れた。

「阿求ちゃんは良く来るのかね？」

「たまに、ですね」

火照った頬を濡らしたタオルで拭い、答える。

ここのお湯は少々熱く、あまり長く首まで浸かるのは宜しくないのだが——疲れた後のこの爽快感はくせになる。

ぼたりと天井から落ちる雫が、湯船に波紋を描いた。

「さてと」

化け狸はそうつぶやくと、頭の上に載せていた葉を手にとると、それをあつという間に酒と杯に変えた。否——もともと酒や杯だったものを、葉に変えて持ち込んだのだろう。

「一献どうかね？——ああ、無論正真正銘、本物じゃよ。ちょっと外じゃ手に入らなくなった銘品じゃ」

「それでは」

こっそり肩に唾など付けつつ、応じる事にする。

何事も用心が肝心である。

……受けた杯から、澄んだ酒精が喉を通って滑り落ちてゆく。すうと胃の腑まで通り抜ける風味は雑身を全く感じさせない。仕事柄、自分でも割合とお酒は嗜む方であるつもりだが、この味は全く知らないものだった。

「ぶは」

確かに言う通りの銘品だろう。温泉でお酒なんて、なかなか出来ない贅沢だ。心地よく湯船の縁に身を預け、私もゆつくりと杯を傾ける。

「御馳走さまです」

「いやいや、お粗末じゃよ。……おぬしには礼を言っておかんといかんしなあ」

彼女が人間に化け、人里で商売をしているということ、私はあえて改版した幻想郷縁起の記述から削っている。それはマミズウさんから申し出のあったことだ。

縁起は妖怪についての知識を人に広めるもので、その性格上、彼等の弱点や対処法を載せないわけにはいかない。それゆえ妖怪達にとつては非常に危険なものにもなりうるものだ。

その成立がそもそも、人間が妖怪に対抗するために出来たのだから当然とは言えるが、歴代の御阿礼の子が彼等に恨まれ、時に命すら落とす羽目になった事は仕方のないことでもあろう。

……だからこそ、妖怪達は自衛のため、馬鹿正直に自分を晒すことをしなくなった。例えば紅魔館の吸血鬼は、自分の弱点について隠そうともしないが——あれは明らかに、わかりやすい弱点を晒すことで、自分を成り立たせている例だ。

これは妖怪達にとつても利点のある話なのだ。なにも致命的な

弱点を晒さず済むと言うだけではない。人間達に「してやられる」手段を用意しておくことで、決定的な決裂を避けることができるのである。

妖怪と人との距離は時代と共に変わり、両者はその距離を模索してきた。それゆえの今、それゆえの縁起である。大結界敷設以後、人と妖怪が新たな関係を築くようになった今の幻想郷において、お互いの対立を煽るようなものを出版するのは、私とて本意ではない。

「それに、妖怪の方から流儀を通してくるとなれば、無碍にはできませんよ」

「お前さんの立場でさりとそれを言えるのもすごいと思うんじやがなあ」

ぱしやりとお湯を掻き分け、マミゾウさんは洗い場へと出た。よいせと椅子に腰をおろし、頭の上に乗せていた葉を持ち上げて指を鳴らす。

「よ」

1枚が2枚、2枚が4枚。見る間に葉っぱその数を増し、さらにどろんと煙を立てて色とりどりの使い魔へと姿を変えた。人、鳥、犬、蛙。カラフルな落書きめいた輪郭の使い魔達が、泡立ってたタオルを持つて彼女の身体を洗いはじめた。

もこもこの尻尾をたつぷりと泡立てて、丹念に洗う彼女の姿に、つい見惚れてしまう。

「……それ、便利ですねえ」

「ん？ なんだったら洗いっこでもするかの？」

「……遠慮しておきます」

あの尻尾のは少々興味が尽きないが、迂闊なことを言ってしまった

うとどんな餌食にされたものか分かったものではない。自車自重と呟いて、私はそつと顔をぬぐった。



「……縁起と言えはですね」

「うん？」

頭を洗いながら——どこから取り出したかシャンプーハットなど被っているのがなかなかお茶目ではあったが——振り返りもせずにマミゾウさん。

「あなたと、ぬえさんについての事なんですが」

以前から気になっていた事ではあった。かつての平安京の夜を脅かした正体不明の大妖怪と、佐渡に本拠を持つ化け狸。どちらも高名な妖怪である事に違いはないが、両者に接点がいまいち見当たらないのだ。

「聖徳王に対してあなたに頼ると言うのは、まあ分からなくもないんですよ。十人の欲を同時に読むと言う彼女に対して、十人に自在に化けるあなたは対抗できると。ただ、ぬえさんがどうしてあなたを呼ぶことが出来たのか、とか。あなたがどうやって結界を越えてきたのか、とか。気になる事は沢山ありますよ」

彼女は、独自に外の世界と通じるルートを保持しているのではないか、というのが私の推論である。これまた幻想郷縁起には書きようのない話だが。

「厳しいのう。ぶらいベアとな事はあまり話したくないんじやが」

「折角の機会ですし、駄目もとで」

「……そうじゃなあ」

ざばりと頭からお湯を振り、ぶるぶると水気を振って散らす。びこびこ丸い耳を揺らして、彼女はゆっくりと話し始めた。

「まず最初の質問じゃが、儂はこれでも外では神様と祭られておつてな。出入りくらいは自由にできるんじゃな。」

——ほれ、妖怪の山のところの神様たちも、活動拠点こそこつちに移しはしたが、外界で完全皆無に忘れ去られたかと言うとちよいと違うじやろう。あんな具合にな、ある程度の保険は外に残しておるよ」

土地に信仰を持たねばならない土着神は少し話が違つかもしれんがの、とマミゾウさん。博麗の大結界がそんなに目の粗いものだとは思ひ難いが、実際に外来妖怪である彼女が言うのだからそうなのだろうか。

「ということは、出入りは自由なんですか？」

「向こうに人を残してきた手前、あんまり軽々しく行ったり来たりはできんがの。こっちの生活も気に入っておるしな。……とまあ、ぬえが儂を呼び寄せたのも似た理屈じゃ」

「ふむ……」

思わず聞き入っていると、使い魔達がお代わりの杯を持ってやってくる。くいと杯の底に残ったお酒を干し、私は彼等の酌を受けた。

「さて、ぬえとの話じゃが……そもそも儂ら狸は、天智帝の御代以前より四国にその本拠を築き、純然たる勢力を保ってきたわけじゃが——四国八百八狸の総帥たる隠神刑部は、常よりも人間達に興味を持っておった。千年を遙かに超える昔より、やがては人

間が妖怪を脅かし、駆逐するかもしれないことを見抜いておったんじゃ。身内鼻根かもしれないがな」

本邦で狸が勢力を築いていたのは、戦国乱世の以前のことで。当時の狸は神の使いであり、人を喰らう獣であった。彼等は、やがてその立場を大陸からやってきた信仰と集合された狐にとつて代わられる。

が、それでも四国は狸達の最後の聖域であり続けたらしい。

「時代が下つて平安、長らく続いた藤原摂関家が勢力を失い、院臣による専横、武士の世の興りと源平の対立と、世が激しい変動を見せる中、狸たちはますますその怖れを強くした。」

屋島の禿太三郎、阿波の金長、淡路の芝右衛門、狸公方こと船場山拜唐、名のある狸は多いが、彼等はみな刑部の意向を受け、人間達の社会に入り込み、多くの勢力に加担した者たちじゃ。かくいう儂もその一人。佐渡で団三郎を名乗るようになる以前は、京で隠神刑部の名代として動いておった」

狸たちは、一つの勢力に加担し過ぎぬように各々の後ろ盾とあったが、それらの意志は総帥たる隠神刑部のもとで統一されていたという。

「儂は当時、飛ぶ鳥落とす勢いの平家に押されて失脚を続ける源氏の後ろ盾として活動をしておった。一方で相手の平家方には屋島の禿が付いて、平重盛とそ一族を守り導いておったわけじゃがな。……その折にな、源氏を脅かす化け物を仕留める双生武竹の矢を探せと申しつけられたんじゃよ」

「双生武竹？」

「そうじゃ。こいつが滅多な場所には生えん竹でう。儂が佐渡に土地勘があったこともあって、たまたまそれが自生しとる場所

を知っておったんじゃが……それがそもそのはじまりじゃよ」

佐渡は流刑地であり、京を配流された者達が多く行き着く場所でもあった。彼等が高い教養と文化を有し、流された先でも独自の勢力を築いていたという。彼女はそうした佐渡の危険性を見越して、遙々海の向こうの島にも拠点を築いていたらしい。

「……とは言えぬえを拾ったのは半分偶然みたいなものじゃったがなあ。源頼政<sup>三浦</sup>どのを失って以降のぬえは見えて居られんでな。

……情にほだされて引き取ったのが運の尽きよ。千年越しで甘えられるとは思わなかったが……一旦頼られると見捨てるわけにもいかんしのう」

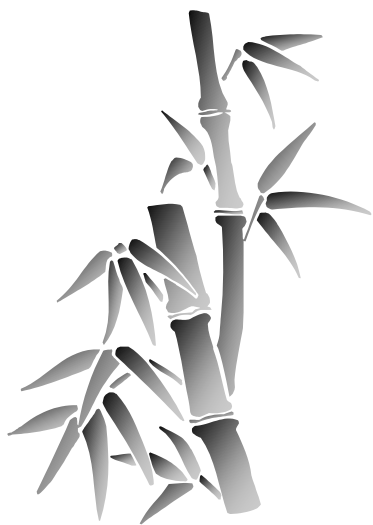
「そんな経緯があつたんですか」

「あー、ちよいと話し過ぎたかのう。できればおふれこで頼むぞい。……ぬえに知られるといういろいろ煩いからの。あやつも正体不明のばぶりつくいめーじを保つのに苦労しとるんじゃよ」

「大変なんですねえ」

苦笑するマミゾウさんに、まるつきり他人事で頷いておいた。

(了)



## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。  
折葉坂三番地の銅おりはと申します。

この本、『捕らぬ狸のアペンディクス』は、阿求の人里での日々を描いたりする、当サークル二十五冊目のSS本となります。

一話目は2年前の合同誌に寄稿したお話の採録、二話目はその時に書いていたものの、お蔵入りになっていたお話の改稿版です。

表題作は二人の鈴奈庵での活躍に惚れこんで思わず書きあげてしまったお話です。連載未読の方置いてけぼり度合いが強くて申し訳ありません。求聞史記にせよ口授にせよ、阿求の著作には、実のところ色々妖怪と人間のパワーバランスや政治的な意図が含まれているのではないかと、うのは以前から気になっていた事でして、今回のお話はそれに着想を得ています。

そして佐渡の矢島（たらい舟で有名なところですが）に鶴退治の矢の材料となった双生矢竹がかつて自生していたというのは最近調べて知ったことで、マミゾウさんとぬえを繋ぐちょとした驚きでした。神主すげえ。とりとめもない掌編集になっちゃったなと思いつつ読み返してみましたが、3作とも阿求がふらりと出掛けるところから始まって、いつの間にかかつての病弱設定を吹き飛ばし、随分アクティブなイメージがついたなあと思うことしきりです。

今回、表紙にはハルシオ様Pixiv ID:40386のドット絵を使用させていただきました。この場を借りてお礼をさせていただきます。

———  
— それでは。  
また次の機会にお会いできることを願って。

## 【奥付】

### 「捕らぬ狸のアペンディクス」

平成25年3月10日

御阿礼祭

オルハザカサンパンチ  
発行 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 あかがね おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の  
「東方 project」の二次創作です。





表紙アイコン：ハルシオ様

東方project Fanbook 2013.3.10 折葉坂三番地